別紙２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文題目：文学テクストにおける「わかりやすさ」の言語学的分析
——テクスト分析への学際的アプローチ

論文提出者氏名　　奥　聡一郎

本論文は、英語で書かれた文学テクストの「わかりやすさ」（comprehensibility）とはどのようなものかを言語学的・文体論的に分析・説明したものである。

本論文は５章から成り立っている。第１章では、まず、語彙の難易度や文の長さをはじめ、いくつかの要件をもとに計量化されてきた「読みやすさ」（readability）の概念を概観している。それに続いて、多くの先行研究がある「読みやすさ」の概念、あるいはそれに基づいて公式化されたテクスト計量の方法論が、一方で読書教材の選択や公文書作成の指標として有効であったとしながらも、読者の読みのプロセスを無視したものであり、テクストがどれだけ読者にとって受容しやすいものかを正確に測り得ていないことを批判する。

第２章では、同じ問題を扱う際に読みの認知的な過程に着目する必要性を論じ、そのような観点を含んだ「わかりやすさ」（comprehensibility）という概念を導入する。そして、「読みやすさ」は、語の音節数や文の長さを基準とした語彙文法レベルの概念であるのに対し、「わかりやすさ」は、読み手の認知過程をも視野に入れたテクスト・レベルでの特質であると定義づけている。

第３章では、テクスト理解における心理学の先行研究と言語学的な参照枠の接点として語彙的・文法的結束構造に焦点を当て、従来の計量文体論でなされてきた単純な分析は、読みの過程が考慮されず、テクスト分析に終始しているため、テクストが読者に与える効果が十分に検証されていないと論じている。その上で、文学テクストの「わかりやすさ」を「首尾一貫性、結束性」（coherence）の程度の差と捉え、読み手の理解にいたる先行表現を同定する際の負荷の相対的な算定基準であるパラメータを措定する。そして、それに基づく分析結果が、それぞれの分析対象となるテクスト群の比較において有意な差を示すことができれば、「わかりやすさ」の基準として理論の妥当性が認められるはずであるとの仮説を立てている。

第４章では、まず分析の枠組みが一般的に応用可能であることを論証するために、文学テクストをはじめ、さまざまなジャンルのテクストを量的かつ質的

に分析し、その比較対照を試みている。まず、結束構造以外の語彙的・統語的指標として、時制、アスペクト、態、動詞の意味的な特性、また文の構造的な語順異常、比喩表現、レトリック構造理論などの視点から一般文学作品や児童文学作品を教材化したリトールド版のテクストの対照分析を行なっているが、関連する語彙頻度を数えるという手作業による分析では大量のテクストが処理できないことや、対象群では頻度に決定的な違いが見られないことから、これらの指標では「わかりやすさ」の測定が難しいと結論づける。次に第3章で構築した結束構造に焦点を当てた分析を行ない、たとえば、Alcott の *Little Women* と Dickens の *A Tale of Two Cities* の比較においては、「読みやすさ」の公式による数値よりも「わかりやすさ」として測定した数値の差のほうが明確であり、その差は統計学的な検定を行なっても有意であることを証明している。

最後の第5章では、今後の展望として、この研究が今後のテクスト分析に貢献しうるとしている。また、「わかりやすさ」の検証が「わかりやすい」文章を書くための指針になると論じ、この概念の言語教育への応用可能性も示唆している。

従来、英語で書かれたテクストの難易度の判定は、もっぱら熟練した読者の主観や直感、あるいはせいぜいこの論文の第1章でも概観されているような計量文体論の単純な公式による数値に基づいて行なわれてきた。そのため、一見読みやすい、あるいは一般的には児童文学と思われている作品のなかにも、実際に読んでみるとなかなかわかりづらいものがあるなどの混乱が生じていた。とはいえ、文学作品とはそもそも摩訶不思議なものであり、読者によって読み方が大いに異なって当然であるとのロマン主義的な考え方に基づき、その難易度を判定しようという試みはあまり本格的になされてこなかった。奥氏のこの論文は、そのような通念からさらに一歩踏み込み、パラメータを洗練させることで、ある程度まで客観的な難易度の判定は可能であるとの仮説に基づき、それを説得的に論証している。世界的にもあまり類を見ない優れた研究である。

ただし、個々の読者の読書体験、教養、年齢などが違う以上、やはり「わかりやすさ」の判定は絶対的なものにはならず、それがこの論文の必然的な限界ともなっている。また、措定されている読者がどうしても筆者に近いものになってしまっていることも問題と言えなくはない。分析対象となっているテクストも、児童文学をはじめ、いわゆる「文学」の周縁に位置する作品であることにも不満は残る。また、readability の公式同様、「わかりやすさ」の分析もかなりの部分が手作業であり、コンピュータのプログラム化まで考えないと、実際には相当の時間がかかるという技術的な問題も未解決のままである。

とはいえ、そのような細かい問題点は論の根幹を左右するようなものではない。全体としては、きわめて独創性に富む、そして有益な研究であり、なにより教育への大いなる貢献が期待できる。以上の理由により、本審査委員会は奥聡一郎が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。